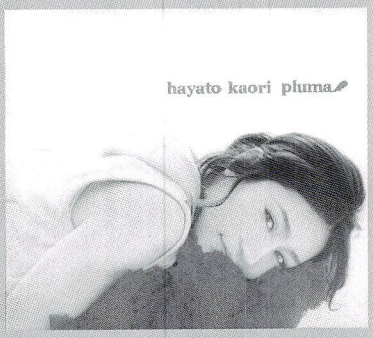


pluma ／隼人加織
VICP-64059　VICTOR　2800円

必ずどこかで耳にしたことのある A.C. ジョビンの「フェリシダージ」「ソ・ダンソ・サンバ」他、ボサノヴァ～MPBの大名曲からコールド・プレイやサザンまでカバー。彼女の作詞作曲によるオリジナル曲も。ポルトガル語、英語、日本語と歌いわける。「完成度がどうとか言うよりも『気持ち』を一番に表現したかった」と一発録りも数曲あり

取材・文／中谷琢弥　撮影／中尾写真事務所

隼人加織
はやとかおり

'01年、当時16歳で ORHA(オルハ)の名前でデビュー。音楽活動の他、テレビ CM やラジオ DJ としても活躍するなど、多才ぶりを発揮。メジャー・デビューとなる今作から、持って生まれた名前である「隼人加織」とする。ブラジル移民100周年の今年、日本人の父とブラジル人の母を持つ、キュートな女性シンガーに注目していきたい。
http://www.myspace.com/hayatokaori

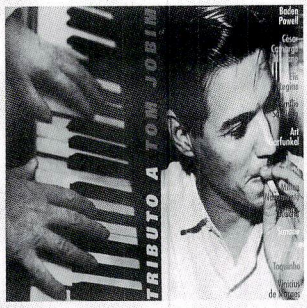
PPS
POWER PLAY SOUND
Music is moistened our life.Tasteful album is here.
W'd like to find your recomended one.

recomended 01

MONTAGE ／ YEN TOWN BAND
EPIC/SONY RECORDS　2800円

原点の一枚はサントラ。Chara も岩井俊二も知らない小学校時代、TV に流れた映画「Swallowtail Butterfly」のタイトル曲に一耳惚れ（しかもサビだけに！）で、フルコーラスを初めて聴いた時は涙が止まらなかった珠玉の一作

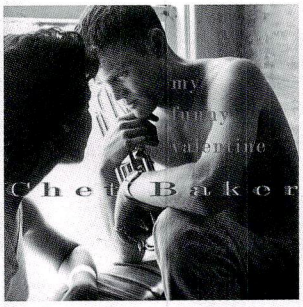
recomended 02



TRIBUTO A TOM JOBIN
／VA 海外版

A・ガーファンクルやスティングが参加するトリビュートは、ブラジルのおじさんから送ってもらった「輸入盤ですらない（笑）」という、日本未流通のもどかしいものだが、「ボサノヴァって、楽しいんだ」と思えるようになった一枚

recomended 03



my funny valentine
／Chet Baker　輸入盤

ジャズのノミネイトは意外だが、音楽から離れていた時期に聴いて、「トランペットもそうだけど、やる気なぁい感じの歌が（笑）、『歌ってリキんで唄わなくてもいいんだ』って思わせてくれた」という、転回点とも言うべき一枚

「ボサノヴァはスピリッツ」可憐な女性が自分のままで歌う

小野リサはもちろんのこと、今、人気爆発中のジャズトロニックやスタジオ・アパートメントといったクラブ・ミュージック勢もブラジリアンの要素たっぷりで、'50年代後半、サンバを元に生まれたボサノヴァと、その発展形とも言えるMPBといったブラジル音楽は、ちょうど地球の裏側の日本で半世紀を経た今も愛され続けている。

デビューアルバム「pluma」でアントニオ・カルロス・ジョビンやバーデン・パウエル、ジャヴァン、レニーニといったレジェンドたちの名曲を見事に歌い上げた彼女もまた、ブラジル音楽に魅せられた一人だ。といっても母親がブラジル人というところで、「それこそ子守唄もポルトガル語だった」もんだから、彼女がそこに進んだことは自然であり、必然なわけで。

「これから先、ずっと音楽を続けるなら自分のままでいることが大切だなって。となると『血』の部分は無視できない。京都に来ると私の日本人としての部分を刺激されるのか、背筋がビリビリビリってなるのも、散歩や料理のときにポルトガル語で独り言を言うのも、両方自分で。二つあるアイデンティティをミックスしたらどんなふうになるんだろうって」

さが絶妙に掛け合わされた出来に。コールド・プレイや東京事変（「化粧直し」をポルトガル語で、というセンスは原曲を知る人ならニンマリするはず）など、非ブラジル音楽もカバーしているが、彼女というフィルターを通過しているからこそ、そこにブレはない。

「日本だと『カバーする』って大袈裟に言われちゃうけど、ブラジルだと『良い曲はみんなのものだからシェアしよう』って考えだから。つくった本人にしても、たまたま降りてきたところが自分だっただけで、いい音は（神様から）もらったもの、っていう感覚」

そういう南米気質は日本人には想像しにくいかもしれないが、確かにそれは当たり前の光景だ。

「あと思うのは、日本だとボサノヴァって聞くと『こういうリズムでこんな（囁くような）歌い方のジャンルでしょ？』ってなるけど、それはつくづく違うなって。ボサノヴァっていうスピリットなんですよね。それを心に留めておきながら、自分から自然に滲み出てくるような音楽をやっていきたい」

そうやって自然体で響かせるからこそ、彼女の音楽は聴く人の心地にフィットするのだろう。